D90 経過観察中16歳を越えた症例をどうするか～我々の方針について～
都立清ヶ丘小児病院 外科
多村幸之進、林 奥、姫形正一郎、
広部誠一、浮山越史、矢野常広、
井崎敏也、石田治雄

目的】近年、小児外科疾患の治療の進歩と、予後の改悪に伴い、長期にわたり治療、経過観察を要する患児が増加してきている。小児外科学会では15歳までを小児としているが、当院では16歳以上も必要に応じ入院加療を進めていく。今後更に成人に達した小児外科患者が増加することが予想されるので当院における16歳以上の患者の現状を検討し報告する。

対象】1988年1月より1992年10月までの間に当院入院した16歳以上の症例を対象とした。

結果】1990年1月より1992年10月までの間に当院入院した16歳以上の症例を対象とした。全症例56例、うち1年以上の症例24例である。

疾患別に悪性間腸炎（UC）が10例、22例、腹腔閉鎖症（BA）が6例、20例、その他難治、食道閉鎖症、十二指腸閉鎖症（DU）、女性化乳房、悪性腫瘍などが多く見られた。また、慢性腎不全、結核症（CP）、血液疾患、慢性肉芽腫症など他科で治療、経過観察される外科的処置を要した症例が17例21例みられた。

治療内容ではUC、BA、DUなどの経過観察目的の内視鏡検査が多く20例45例、鏡下、ヒルシェルプルン病術後の肛門形成術が各3例、イレウス解除術、膣層切除術、乳房摘出術（女性化乳房）、虫垂切除術、腎摘除術が各2例、その他悪性結腸腫瘤切除術（白血病化学療法後二次発癌）、Nissen胃造膿術などがみられた。

年齢別に当院経過観察中の16歳以上20歳未満の患者は37例69例であった。20歳以上はUC合併食道閉鎖、情緒障害を有するDU、鏡下術後患者など69例であった。他科経過観察下の患者では20歳未満が11例15例、20歳以上が4例6例であった。

考察】患者が20歳を超えると可能な限り成人医学機関に紹介するのが当科の基本方針であり、16～19歳はその移行期と考えている。特にUCやDUは積極的に転院を進めており、その結果20歳以上の症例が少ないくなっている。これらの疾患は比較的容易に成人医学へ移行されるが、後療法など特殊な治療を要する患者や精神障害を有する患者では受け入れ先が見つからず、当院で経過観察、治療を行っている。今後小児外科患者の加齢に伴い、成人医学機関への円滑な移行、また特殊な疾患においても小児外科医の連携の可能な受け入れ先の確保が必要と思われた。

(185)